

1. 当院におけるノロウイルスによる 急性胃腸炎に対する黄芩湯、 小半夏加茯苓湯の効果について

独立行政法人 国立病院機構 神戸医療センター 泌尿器科
大岡 均至

【緒言】 当院入院病棟におけるノロウイルスによる急性胃腸炎に対する黄芩湯・小半夏加茯苓湯（以下ノロ方剤）の有用性につき検討した。

【方法】 2012年12月16日に外出にてノロウイルスに暴露したと判断される患者より同一病棟内に9名の急性胃腸炎症例（平均年齢；52.0歳）が発生し（ICA法にてノロウイルスの診断確定）、嘔吐物・排泄物の処理に当たった7名の看護師も同様の症状を呈した。担当スタッフ（平均年齢；29.6歳）は感染症例への初期対応時（PPE未着用）にウイルスの暴露を受けたものと判断された。入院患者9例の内4例、スタッフ7例の内5例に方剤〔黄芩湯2.5gr.+小半夏加茯苓湯2.5gr.〕×3回、1日分）が処方された。本方剤の臨床的有効性につき検討する。

【結果】 急性胃腸炎発症症例16例において投薬なし群とあり群で有意な嘔吐・下痢持続時間に有意差が認められた（なし群；46.3±16.1、あり群；23.1±19.1時間、 $p=0.022$, t-test）。また、入院患者中9例中8例は3カ月以内の術後症例で、院内スタッフも含めた非手術症例と手術症例との間にも症状持続時間に有意差を認めた（非手術群；21.5±11.8、手術群；45.0±22.1時間、 $p=0.019$, t-test）。しかし発症した入院患者やスタッフにおける投薬の有無での症状持続時間に関しては統計学的有意差が認められなかった（入院患者〔なし群；52.8±13.7、あり群；33.0±25.0時間〕、スタッフ〔なし群；30.0±8.5、あり群；15.2±9.3時間〕）。

【考察】 ノロウイルスによる急性胃腸炎はその感染力の強さから病院感染対策上注意が必要な感染症の1つである。今回の病院感染は当院スタッフにも感染が及んだものの1週間で終息した。入院患者は術後症例が多く、スタッフより有意に高齢であるがノロ方剤の投薬により症状の改善が期待できる。一方スタッフは、元来健康でありノロ方剤の投薬が無くても回復が早いと考えられるが服薬することが好ましいと判断される。ノロ方剤の内服開始が入院症例に比してスタッフはやや遅くなる傾向もあり速やかな服薬開始も肝要であると思われた。